

SHINGON HORONIC

# 色は匂へど

IRO

WA

NIO

E

DO



PHOTO SHU FUJIWARA

特集 弘法大師の社会事業 1 満濃池

平成十三年睦月一日発行 卷十七



PHOTO SHU FUJIWARA

## 一人の善き母は 万人の教師に勝る

漢字の『母』は『海』という文字の中にある  
フランス語の海という単語『MERE』は  
母という単語『MERE』の中にある

母にも海にも偉大な生命と心を生み出す根源として  
普遍的な意味と価値がある

弘法大師空海は海にも山にも、そして宇宙にも偉大なる  
生命と心があると説かれている

DNAがいくら解明されても生命と心の深淵はわからない  
海にも宇宙にもDNAはないのだから

特集 弘法大師の社会事業

墨蹟聚集の会報より

満濃池



3

お釈迦さまの真理の花束

13



現代の道しるべ

15

新刊の紹介

17



弘法大師の芸術論 西宮 純

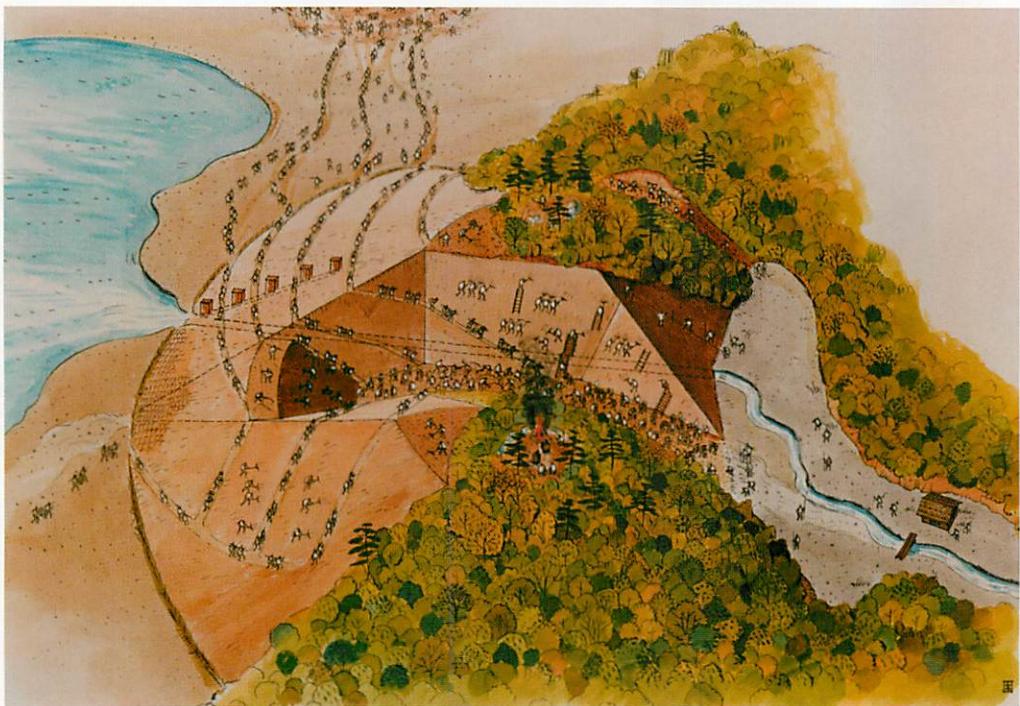
16



『真言七祖像』について 真鍋俊照

11

# 特集 弘法大師の社会事業 満濃池



当時の修築の模様を再現した絵（資料提供 大林組）

四国香川県の満濃池は今も満々たる水量、一四五〇万トンを誇り、広大な面積の農地を潤し、人々の心を豊かに耕し続けている。

この満濃池の歴史は古く、文献上明らかになるのは大宝年間（七〇一年～七〇四年）國守道守朝臣による築造が一番早い。

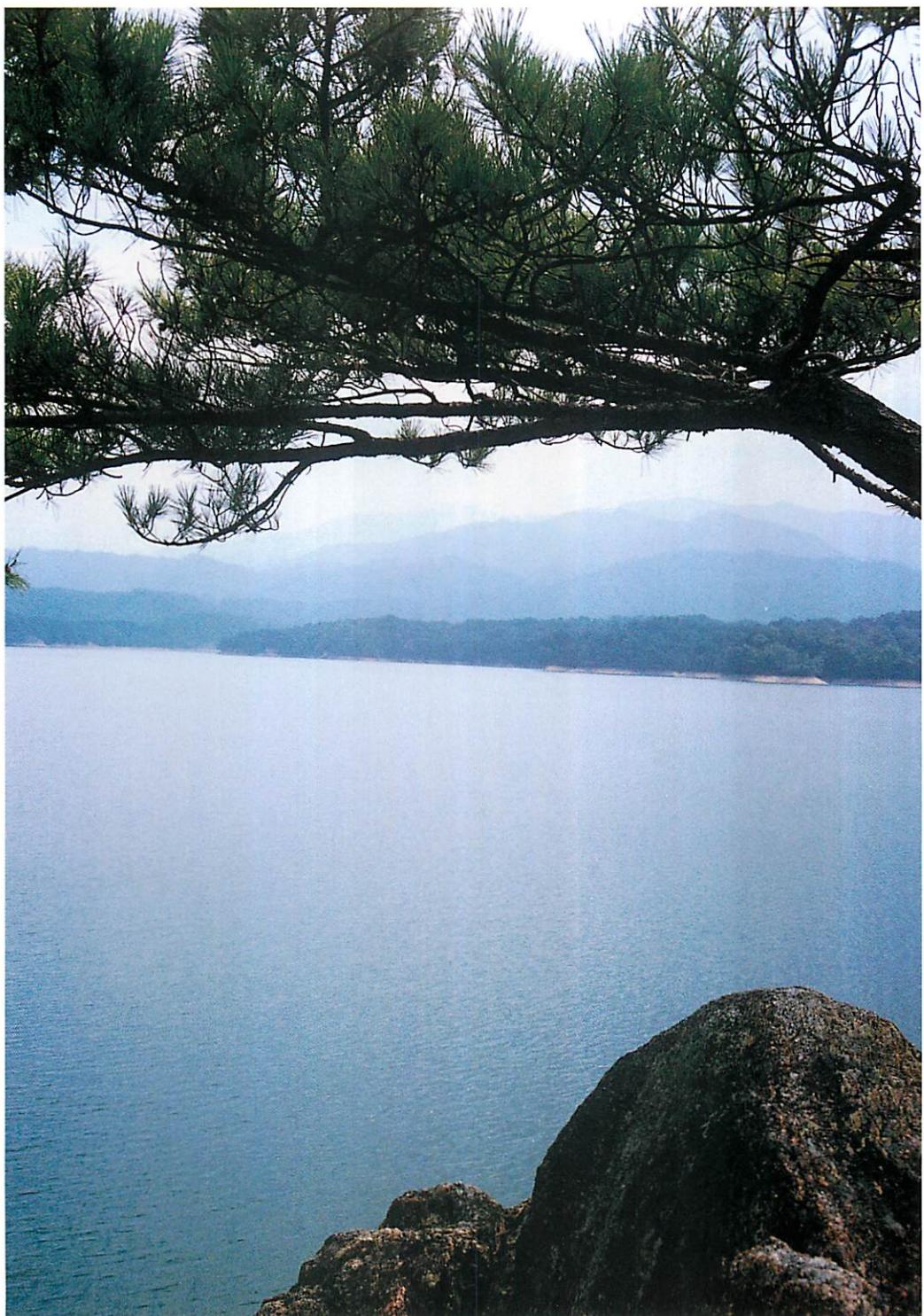
大和朝廷に近く、日照の優れた香川の地、讃岐平野からの米の収穫は大和朝廷には欠くことの出来ないものだった。しかし全国平均の7割にも満たない降水量と東西に拡がる讃岐平野は南北には狭く、峻険な地形のため、雨水は瞬く間に海に到達し、ときには災害をも引き起こし、土地を潤すことは、香川の人々の至上命題だった。

この地の最大のため池が満濃池だ。

しかし実際にはため池と言う印象からは比較にならない、大きなダム湖を想像した方がいい。その貯水量は日本全国に約三千あるダム湖の中でも上から二六〇番目ぐらいで、現在でも満濃池の水の受益面積は四六〇〇ヘクタールに及ぶ。

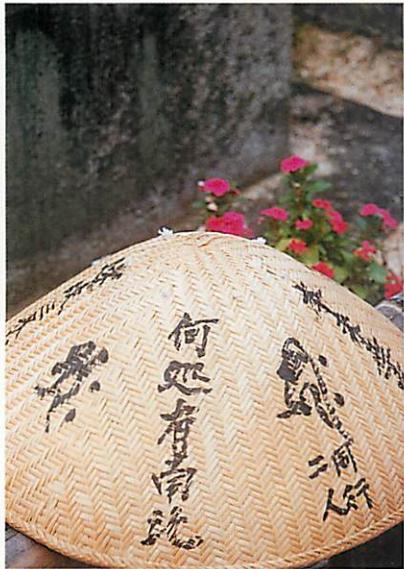
ここに一つの池あり。掘ることは人力なり、成ることは天よりなる。車馬霧のごとくに集まり、男女雲のごとくに連なれり。

今も満々たる水を湛え二市三町（丸亀市、善通寺市、満濃町、多度津町、琴平町）の四六〇〇ヘクタールの水田を潤す。



## 国司の上奏文

昨年から築池使がこの池の修復にあたつておりますが、貯水池は広大でしかも工事に携わる者は少なく、いまだ完成の見通しさえ立ちません。さて郡司たちの進言によりますと、僧空海は同じ讃岐の多度郡の出身であり、彼の行ないの高貴なことは太陽をも凌ぎ、その名声は天に登るが如くです。ひとたび山中に座禅すると彼の下に鳥が飛んで来て巣を作り、獣たちは馴れ従います。彼は遠く海のかなたまで道を求め、行くときは身ひとつで行きながら、大きな実りを持つて帰国しました。道を求める者は僧俗ともに彼の気風に接して喜び、民衆は彼の姿を見るだけで尊敬の念を抱きます。空海のとどまる所には生徒が市をなすように集まり、彼が行く所には従う者が雲のように群れ集います。彼は久しく故郷を離れて、近頃は都におりますが、農民たちは彼のことを父母の如く慕っています。もし彼が来ると聞けば、履物もはかずに飛び出して迎えることでしょう。どうか空海に貯水池修復の任をご命じ下さい。



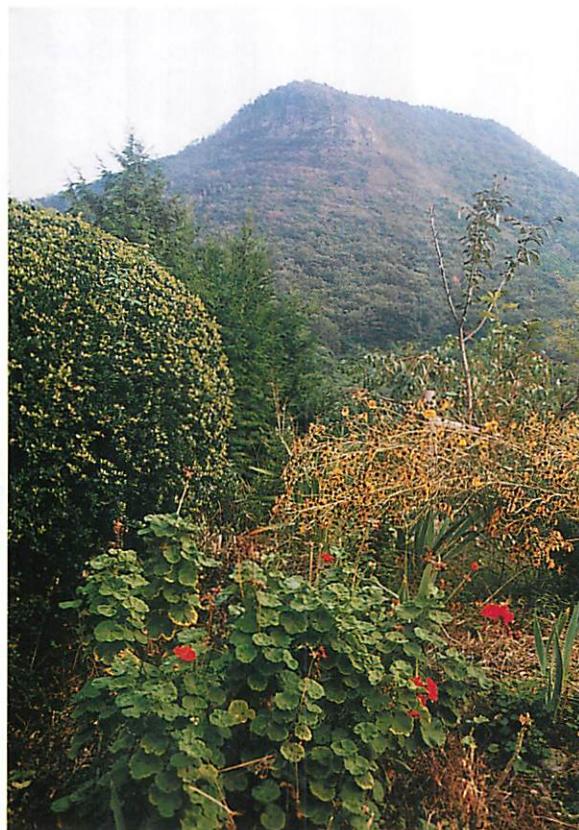
## 讃岐の国司から朝廷へ

弘法大師を修築の任に当たることを要請する上奏文が送られた

阿讚山脈から瀬戸内海へ流れる急峻な金倉川を堰き止めて造られた満濃池は八世紀初頭に文献上に姿を現す。その後幾たびも決壊を繰り返し、八一八年には大決壊し大きな被害を出した。朝廷は築池使を遣わし修築に当たらせたが工事は困難を極め容易には進まなかつた。



四十代になると弘法大師は、自身の寿命の尽きることを感じられていたらしい。弟子達への遺告を書かれている。しかしその一方で目に見える形での社会事業や寺院の建立、奈良仏教の密教化など、実に激しい速度で日本の中に真言密教哲学を根付かせ、具現化していかれた。



弘法大師にとつては、学校を作り人を育てることも、宮廷で天皇や貴族達と交わり詩をつくることも、何万という人々の力を借りて、広大な満濃池を築造することも、すべて真言密教大日如来の活動の顕現に他ならなかつた。

満濃池がある香川県は弘法大師空海出生の地として、普通寺があり、また幼名真魚として親しんだ風景がいまも良く残っている。幼い日、自らの存在の必然を仏菩薩に問うて、身を投げた山も残る。

「御年六、七歳のころ、讃岐の険しき山に登りて、十方を念じ、三宝を誓い、「我行く末、仏法をひろめ、衆生を導くべきならば、諸仏あわれんで命をつがせたまえ。その儀成就すべからずば、我が命すてなん。」と誓つて身を投げること三度。いまだ地に至らざる度ごとに天人あま下つて取り上げたまう。」

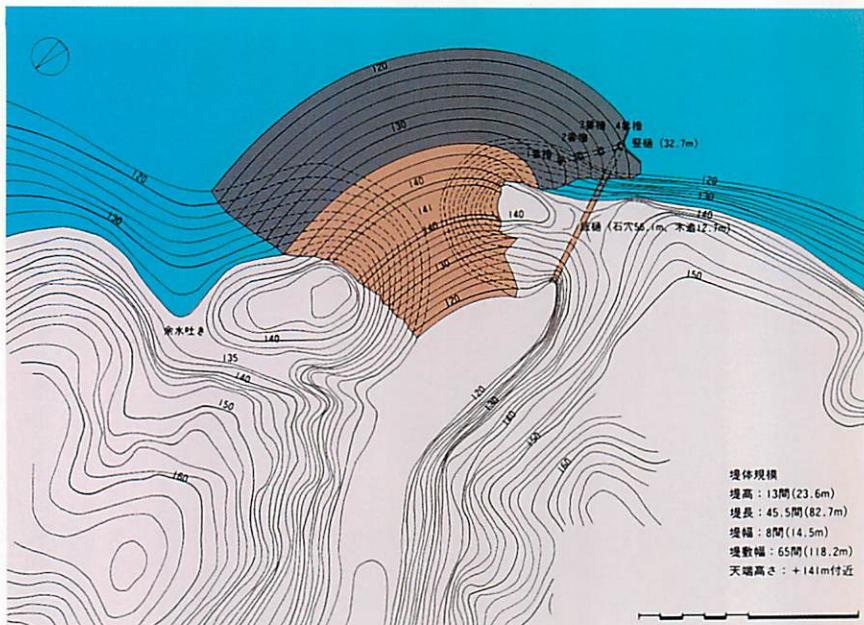
幼名『真魚』といい、幼い頃から優れた才を輝かせ、両親からも『貴物』と呼ばれた幼き日の空海は土で仏像を造り手を合わせ、また自らの身命を賭して三宝への帰依を誓い、その誓願は今も多くの人々を救い導いている。

満濃池修築という大事業は弘法大師の現代に変わらない類い希な土木技術の知恵と、弘法大師を慕う多くの人の心が一つになって初めて完成を見ることができた。



今も多くの巡礼者が弘法大師の徳に触れるために訪れている。

## 弘法大師の修築技術

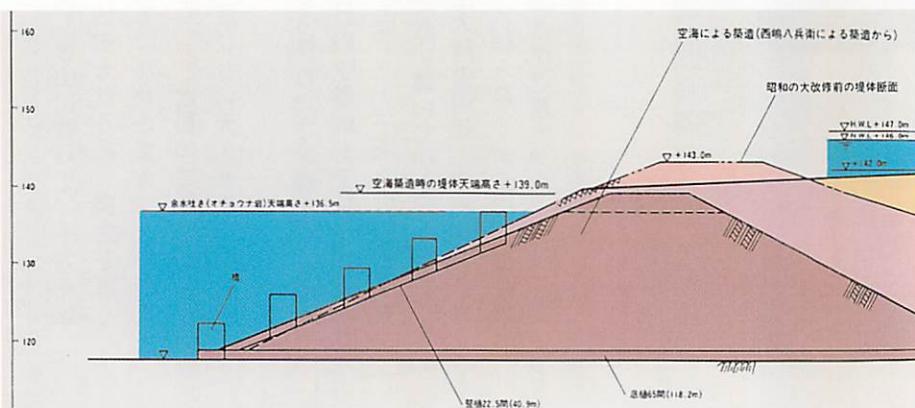


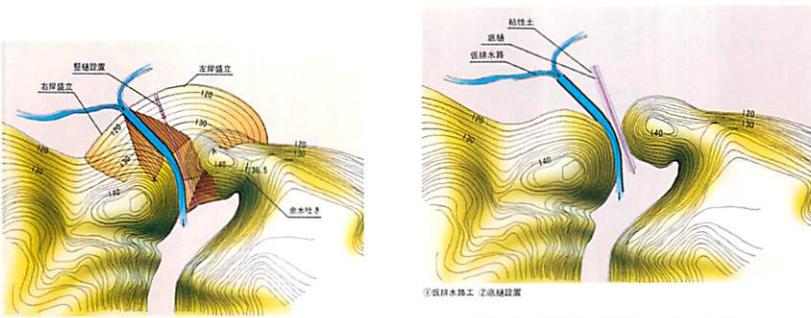
小学生の時『黒部の太陽』という石原裕次郎主演の映画を授業の一環で見に行つた。黒部渓谷という厳寒な険しい山中にダム造りに賭ける男たちの戦いが描かれていて、完成までの行程の困難さに驚き、完成したシーンでは拍手が起こったのを覚えている。その時アーチ式ダムという言葉を知り、すごい技術だと子供心に感心した。すぐ家の庭に水路を造り、アーチ式のダムを造つた。

このアーチ式ダムの技術が日本で最初にしかも千二百年も前に、弘法大師が満濃池で完成させていた。

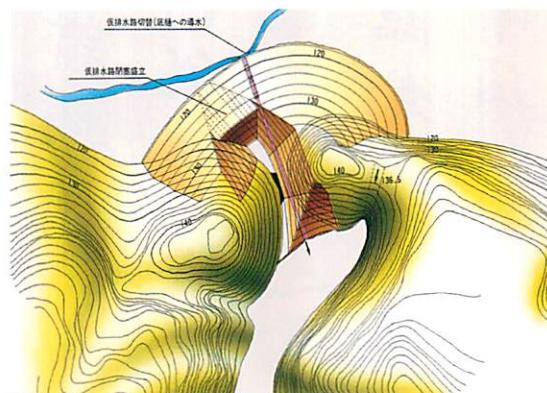
修築作業は困難を極めていて、国司が朝廷に弘法大師を修築の任に乞う上奏文は先に紹介したが、この困難を極める事業を弘法大師は、わずかな期間で完成させていた。

その間、工事を監督するかたわら、お護摩を修法し、工事の無事完成と工事に当たる人々の安全を祈り続けた。





仮排水路の左右の岸を盛り土する  
仮排水路（青）を通す



仮排水路を締め切り盛り土をして完成する

先年（株）大林組が満濃池の調査をし、弘法大師修築の規模の全容が明らかになつた。

その行程の巧みさ、緻密さは、想像を超える。

堤体の総土量九万四千立方メートル。

工期約九ヶ月

延労働人員数は三十八万三千人。

当時の讃岐の人口が二十万人程度といわれる。この修築がいかに巨大なプロジェクトだったかがわかる。

弘法大師の徳望が無ければこれだけ多くの人を集めることはかなわないし、その徳望を裏切らない高い技術力を兼ね備えていたことが、弘法大師が今に生きる大きなカリスマだろう。

誓辯供具六月上旬入學法灌頂  
壇是日臨大悲胎藏大曼茶羅依  
法拈花偶然着中台毗盧遮那  
如來身上 阿闍梨讚曰不可  
思議再三讚歎而沐五部灌  
頂受三密加持從此以後受胎藏  
之梵字儀軌學諸尊之瑜伽觀智  
智七月上旬更臨金剛界大曼茶  
羅重受五部灌頂而拈得毗盧  
遮那 和尚驚歎如前八月上旬  
又受傳法阿闍梨位之灌頂是日

六月上旬に学法灌頂壇に入る。

この日大悲胎藏大曼茶羅に臨んで、  
法によつて花を拋うつに、

偶然にして中台毘盧遮那如來の身上に着く。

阿闍梨讚していわく、不可思議不可思議なり  
と。

再三讚歎したもう。すなわち五部灌頂に沐し、  
三密加持を受く。これより以後、胎藏の梵字・  
儀軌を受け、諸尊の瑜伽觀智を学す。

七月上旬に更に金剛界の大曼茶羅に臨んで重ね  
て五部の灌頂を受く。また（花を）拋うつに毘  
盧遮那を得たり。和尚驚歎したもうこと前のご  
とし。

八月上旬にまた伝法阿闍梨位の灌頂を受く。

僅かな三ヶ月という驚異的な早さで恵果和尚か  
ら伝法された様子が、美しい筆使いで淡々と書  
かれているが、その内容はまさに驚嘆に値す  
る。



東寺藏 龍猛菩薩像 弘法大師真筆の飛白体で書かれた美しい讃が舞う

『弘法大師墨蹟聚集一書の曼荼羅世界一』の申し込み お申込お問い合わせは  
電話 03-3705-7238 ファクシミリ 03-3703-4979

# 墨蹟聚集の会報より

## 『真言七祖像』

宝仙学園短期大学学長

真鍋 俊照

今日、わが真言宗において高祖弘法大師空海の請来になる確実な伝世品としての絵画は、国宝『真言五祖像』である。金剛智、善無畏、不空、惠果、一行がそれである。これに龍猛、龍智の二像を加えて七祖像とし、後に空海も加えて真言八祖像とし、その模本の多くは宗門では内陣の壁に掛け大切にしているのである。

私が、これらの原本を最初に見たのは、三十五年ほど前である。日本に来たアメリカのローゼンフィールド博士（東洋美術史）とケーヒル先生（中国美術）を案内して東寺を訪ねたときである。両先生は、その一ヶ月前から私に手紙をよこし、どうしても「不空金剛像」を拝見したいと、まるでその為に日本にやつてくる旨の内容だったので、私はその許可を直接、鷲尾長者に頼んだのである。なかなか難しかったが、面倒を見るという条件つきで、なんとか許しを得た次第である。とくに喜んだのはケーヒル先生であった。東寺の宝物庫のうす暗

い一室で「不空像」の大幅をひろげて、ほっとしたのを覚えている。

この画像は、唐代一流の道釈画の名手、李真の手になるもので、ケーヒル先生は原画を見た喜びを、その後一晩三人で語りあかした中で、長々と話してくれた。私も軸を下までさげたあと原本を見上げたら不空の顔の大きな鼻、きりっとむすんだ口、眼光するどい目、微細なまゆ、あるいは右の耳などその写実的な描線の力強さにびっくりした。また頭上を見るとかすかではあるが、剃髪した髪の残りぐあいが見事なのに驚いた。両手は胸元で左右それぞれの五指を外縛させ、がつちりした腕組みを感じさせる。実にそのデッサン力のゆるぎない描写力は、なみなみならぬものがある。墨染の衣のひだにみられる段々の隅取りのふわっとした布のやわらかい感触、どれをとっても写実力のすごさに目を見はつた。

この時の感激は、その後の博物館の展示

不空像を描いた李真は、段成式の『京洛寺塔記』にも当時のすぐれた評判を訳されて

いる。七祖の内の真言五祖像は、まさしく李真等十余人の集団で描かれたが、この不空像は私は李真一人で描いたものではないかと考えている。特に長い眉毛を配したり、それに何よりも表現力の中心となるするどい神がかり的な威厳のある表情づくり、とくに瞳の表現力にその迫真的画法の力を感じる所以である。後の二点すなわち龍猛、龍智は、大師帰朝後に作画されたようになに『東宝記』や『性靈集』は伝えている。確かに龍智の衣文を不空像と比較してみると、描線の迫力、力強さはとても不空のそ

れにおよばない。

後日談になるが、両先生を私に紹介されたのは、キーン先生だったのである。キーン

先生と私の出会いは、もうとても古い。

ところでこの不空像の衣を墨染といった

が、画面は、藍青色の顔料で、よく見ると黒と言うより青黒い。不空像のとらえ方、デッサンの手法は、むしろ敦煌の人物表現に近いから、衣のひだやその陰影のつけ方は、西方からの影響を色濃く残しているとみた方がよいのではないかと思う。そのことを考えながら肌の表現をみると、赭黄の肉身のぼかし方などは、崇高な身体というより、不空の肉体そのものに現実味をただよわせている趣がある。また唐時代の「伝神写貌」そのものの実現である。



東寺蔵 真言七祖像 不空金剛像 唐 李真により描かれた美しい彩色が残る  
讃は弘法大師真筆



There is no concentration to him who lacks wisdom,  
nor is there wisdom to him who lacks concentration.  
In whom are both concentration and wisdom-he,  
indeed, is in the presence of Nibbana.

The Bhikkhu who has retired to a lonely abode,  
who has calmed his mind, who clearly perceives  
the Doctrine, experiences a joy transcending that  
of men.

無禪不智

無知不禪

道從禪智

得至泥恒

富學入空

靜居止意

樂獨屏處

一心觀法



智なき人に  
静慮けさはなし  
静慮けさなき人に  
智あるはなし

人もし

静慮しずけさと智ちとを

具えれば

彼はすでに涅槃きどりに

近づけるなり

心しづかなる

比丘は

人なき家に入りて

正しく法を

観じ

人中になき

たのしみをうく

# 現代の道しるべ

経済と経世済民

前号ですこしふれた江戸時代の山片蟠桃<sup>ばんとう</sup>は、大阪の米穀商『升屋』に十三才で丁稚に入る。しかしまもなく主人が亡くなり、店は大きく傾いていします。

蟠桃二十一才の時。幼い遺児を擁し彼は店を建て直すことを決意し、十一年後には仙台藩に金を貸せるようになる。そして仙台藩の信用を得て、仙台藩の財政の建て直しも見事にやる。それは徹底的な合理主義に基づいている。

仙台藩が農民から年貢で取り立てた、残りの農民の米を、仙台藩が買い上げ、それを江戸で売る。その利益を仙台藩が貸し付けた。その莫大な利息で藩の財政が豊かになつていった。蟠桃は江戸へ売る米の手間をすべて肩代わりした。その費用は「差し米」という俵に竹べらをさして、米を調べる。そのへらに残った米を、升屋がもらうことを申し出て許される。その米のおかげで経費を差し引いてもなお数千両が升屋に残つたという。

蟠桃は幕府からも一目を置かれ、出身地の姫路藩の家老が、蟠桃の意見を聞くときも蟠桃を上座に据えるほどだったが、蟠桃

は『升屋』の一介の番頭であり続けた。と同時に『夢の代』という大著を著し、そこには徹底的な合理主義のもとに、無神論、地動説が展開されている。

蟠桃はもちろん生涯一番頭に徹した自らを現したもの。蟠桃は三千年に一度実を結ぶという桃のこと。

さて今の日本経済にあるいは政治家に蟠桃のごとく徹底的な合理主義でいけばこの窮状はたちまち解決できる。

日本全体を覆う無駄の数々。なかでも官僚達の天下り先のためだけで、血税をウワバミのようにのみつくす外郭団体や特殊法人の数々。地元の土建業者しか潤わない、公共事業の数々。使うことのない飛行場、釣り堀にしかならない港、車が通らない道路。さらにはどの国からも感謝されなければかりか、軍需費にも使われてる海外経済援助。

世界でも類を見ない、高い公共料金と過酷な税。そして将来への不安からだけの、高い貯蓄率。そして全く意味のない政党助成金をとり続け、倫理感覚が欠如した政治家達。

マスコミはじめ子供たちを害する情報が氾濫する中で、『ミツノ財團』のような地道なメセナはやがて人心の荒廃を救い国際交流の大きな糸と糧になつていいく。

弘法大師の満濃池修築はその時代の人々に喜ばれるだけでなく、千二百年の時を超えて人々に感謝されている。これこそ真性の公共事業だ。

さて一時華やかだった企業メセナという言葉も最近はすっかりその陰を潜めてし

まつた。メセナも大企業の場合、オペラがはやればオペラを呼ぶといった、場当たり的なものや宣伝活動と区別が付かないものが多い。

そうした中でオーナー企業による心ある財団や、積極的にボランティア活動を企業全体でする外資系金融機関などもある。

およそ詩や散文というものは、それを作る人の本性に関するものである。かつて、フランスの文学批評家ロラン・バルトは『文章の零度』の中で、文学を言語と文体と文章とに分け、文章は歴史や伝統の産物であり形式のモラルであるが、文体は作者の個人的な秘密の神話のなかにある作者自身の〈体液〉変質であり、彼の光輝にして彼の牢獄であり、彼の孤独なのであり、思想の孤独な垂直な次元のようなものであり、常にひとつの秘密であるといった意味のことを言つた。そして現代の文学は、文章は破壊され存在しないものであり、文体のみが存在する（これを文章の零度というわけでだが）とも言つた。お大師様の時代は、まだ文章というものが破壊されておらず、むしろ文章全盛時代であったと考えられるが、それでも、「論文意」の終わり近くでは、皎然の『詩議』の引用を通して、最終的に文体ということの問題を取り上げ、お大師様は、人には「巧拙清濁」があるといふ。これは『文選』卷五十二（魏・曹丕「典論論文」）の「文は氣を以て主と為す。氣の清濁には体有りて、力めて強いて致すべからず。……巧拙に素有り、父兄に在りといえども、子弟に移す能わづ。」という考え方が下地にあるのだが、つまり、文学作品には、固有の文体、それを作る人特有の個性があり、

まことに、これは「力めて強いて致すべからず」ざるものがあり、つきつめるならば、「至解（至上のさとり）」に属す。それなお空門（仏教）の証性（さとり）に中道有るがごときか。何となれば、或は態有り（姿整う）といえども語よわく、力有りといえども意薄く、（姿）正しといえども質（地味）、直しといえども鄙（つまらない）なり、神をもつて会すべく、言をもつて得べからず（ことばでは言い表せない）、これいわゆる詩家の中道なり。」と述べている。まさに「寒松白雲（嚴冬の松にたなびく白雲）は天全の質（天与の全き資質）であり、散木の擁腫（節くれだつた無用の木）もまた、天全の質なり。」けれども、詩においては、その姿が「正しいといえども秀でざるは、それ擁腫の林なり。」と。実際、あらゆる点から見て全て完璧な「体」を具えているのは、子建（曹植）と仲宣（王粲）のみで、あとの詩人たちは優雅さとか豊潤さとか、清らかさ、華麗などという一方の長所をのみそれぞれに擁するだけで、すべてにわたつて能く兼ねて通ずるという完全さを具えている詩人はいない。いわんや、齊・梁以後は、正声ようやく微にして、古人に及ぶものはいない、としている。

ロラン・バルトは、現代は文体の時代だと述べ、文体は、作者自身の〈体液〉の変質であ

り、常に秘密であると言つたわけだが、お大師様も、「至解に属す」ものであり、「神をもつて会すべきもの」であると言つてゐる。ある。「体」というのは、比喩的に言えば、本来、五体満足に備わつていてこそ、正しいと言えるのだが、それだけでは完全であるとは言えず、その「姿」が「秀いで」ていなければ完全とは言えないという考え方がある。つまり、お大師様の時代においては、いわゆるバルト的な文章の概念も生きていたのである。むしろ、その方向にどんどん流れで行く傾向を危ぶんでいたのが実情であろう。いわゆる典故という歴史的伝統的なものを重視し、下地にしていたからである。形式としてのモラルが重要視されるようになつてきていたのである。しかも、ここにおいては、文体は、天与の資質にかかるものであり、教えて教えられるものではなく、まさしく「力めて強いて致すべからず」ざるものであり、「素」なるところのものであつたからである。

六、地球上に時差があるように、オーケストラをいくつかの時間帯として配置する。

オーケストラに対して、日本の伝統楽器をいかにも自然にブレンドするというようなことが、作曲家のメチエであつてはならない。むしろ、琵琶と尺八がさししめす異質の音の領土を、オーケストラに対置することで際立たせるべきなのである。

一、数多くの異なる聴覚的焦点を設定すること、これは作曲という行為の（客観的な）側面であり、また、無数の音たちのなかに一つの声を聴こうとするのは、そのもうひとつの側面である。

二、洋楽の音は水平に歩行する。  
だが、尺八の音は垂直に樹のように起る。

三、尺八の名人が、その演奏のうえで望む至上の音は、風が古びた竹藪を吹きぬけていくときに鳴らす音であるということを、あなたは知っていますか？

四、まず、聴くという素朴な行為に徹すること。やがて、音自身がのぞむところを理解することができるだろう。

五、イルカの交信がかれらのなき声によつてはなされないで、音と音のあいだにある無音の間の長さによってなされるという生物学者の発表は暗示的だ。

七、一つの音楽作品がそこで完結したという印象を与えてはならない。周到に計画された旅行と、あらかじめ準備されない旅行とでは、そのどちらが楽しいでしょうか？

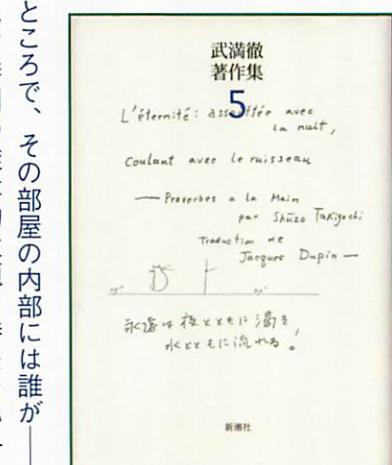
八、現代作家の多くが独自の工夫を凝らした音の壁を築いた。

武満徹氏の著作全集が刊行された。武満音楽の作曲の秘密や、氏がめざしてきたものが明晰に語られていく。中でもこの「ノヴェンバーステップス」のライナーノーツは実際に多くの示唆を含んでいる。

『徳の起源 他人を思いやる遺伝子』  
マット・リドレー著

翔泳社

生物は利己的な遺伝子の乗り物にすぎないのか。自らを犠牲にし他人を思いやる心も遺伝子に組み込まれているのか。徳の起源を遺伝子工学から検証する。二十一世紀は徳性と徳政の時代がくる。



『ノヴェンバーステップス』は、ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団創立二五周年記念のための委嘱作品として作曲を依頼され、一九六七年十一月に同交響楽團によつて初演された。

（武満徹著作全集より）



## 『二十世紀の忘れ物』

佐治晴夫 松岡正剛

講談社



## 『春夏秋冬』

後藤 裕

春夏秋冬出版委員会



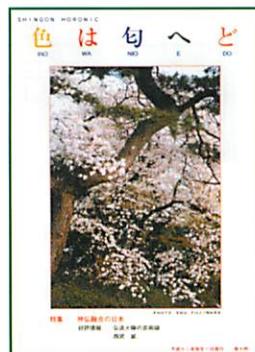
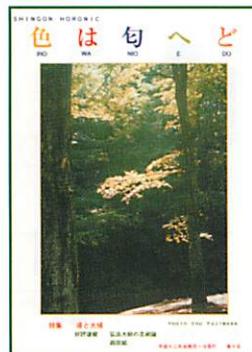
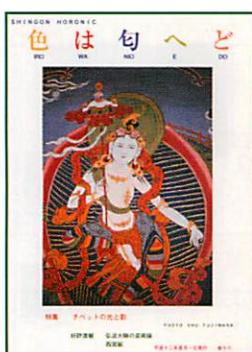
夢の呼吸、時の芳香、空の破片といったテーマで語り尽くす世界は、心の領域から芸術や歴史、宇宙論まで、実に多様にして深い対談集。しかもけして堅苦しくなく、全編が美しい詩のように、二人の口から紡がれ響きあつていて。かたやかなりのスピード狂でパイプオルガンを奏で昼の星を眺めるのを無情の喜びとする物理学者、かたや日本最高の知性の一人で対談の名手。

こんな二人が小学校の先生だったら、子供たちは学ぶことの楽しさを知り、どんなに夢や希望を持てるだろう。夢を忘れた大人たちも必読の書。

バブルが崩壊して十年がたつ。この十年を日本の失われた十年と見る経済評論家もいる。しかし実際に経営に当たる者にとっては、日々が厳しい現実にさらされ、その中を生き抜く知恵を絞らなくてはならない。

幅広い人脈と豊かな感性を備える著者が社内向けに書かれたものを纏めた本書は、この十年を生きた経済の中から見据えた真実を伝えていく。「仕事には徳がある」「毎朝社員や周りの人の幸福を神仏に祈る」「今の日本人が失った三つの宝。勤勉の精神。節約の精神。親孝行の精神。」経営者としての社員への暖かいまなざしが感じられる多くの至言がちりばめられている。

## 『色は匂へど』この一年





次回発行は3月1日予定  
特集 真言密教と日本文化1 能の世界

Editor RYUJU ABE Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA Special Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA  
Editorial Staff/ MIWA SAMURO KOJI TOKUMARU REIKO ONUKI KAZUFUMI MOTOYAMA IIDA SHUNJI  
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA+BENRIDO Printing KORINKAKU  
PUBLISHER RYUBUN ABE EDITOR RYUJU ABE EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIN S.H.C

〒158 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話 03-3705-1622 ファクシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第十七号 平成十三年睦月一日発行